

## Book Review 36-17 パラレルワールド #富士山

『#富士山』（平野啓一郎著）を読んでみた。著者は京都大学法学部卒。『日蝕』で第120回芥川賞を受賞。美術、音楽にも造詣が深い。国立西洋美術館のゲスト・キュレーターとして開催した展覧会で、フランス芸術文化勲章シュヴァリエを受章。2019年に『マチネの終わりに』は映画化された。

平野啓一郎氏の本は、初読。本書は10年ぶりの短篇集だそうだ。人生は偶然の積み重ねである。著者はちょっとした偶然の悪戯で別の選択をしていたらどうなったのかをパラレルワールドを通して描いている。些細なことで、私たちの運命は変わってしまうのだろうか。そんな5編である。

### 富士山

コロナ禍の中マッチング・アプリで知り合った男女が、東京から浜名湖へ旅行に出かける。男性は窓側に座って富士山を眺めることに拘る。女性は違和感を持つ。途中反対車線に止まった新幹線の窓から少女がSOSを送ってくる。女性は下車して、運よく助けることができたが、男はついてこない。女性は男性に何か違和感を持ち、旅行も中断してしまい、その後没交渉となる。しばらくして女性はその男性の死亡を知る。何があったのか。相手の本性を知ることは難しい。

### 息吹

伊吹とは主人公の名前である。かき氷屋が満席だったということで、マクドナルドでアイスコーヒーを飲むことにした。隣の女性たちの会話から大腸内視鏡することにした。その結果、早期大腸がんが見つかり、無事切除できた。ところが、主人公はかき氷屋が満席でなく、座れていたら、女性たちの会話を聞くこともなく、大腸内視鏡も受けず、気づかないまま大腸がんで死んでしまっただろうというもう一つの人生が頭から拭い去れない。さてどうなる・・・

### 鏡と自画像

人を殺して死刑になりたいという男の話。すべてを終らせたいとナイフを手にしたその時、ドガの自画像が主人公を見つめていた。・・・

### 手先が器用

こどもの頃にかけられた、祖母からの「手先が器用」だねという誉め言葉。その一言が祖母、母、自分、娘へと受け継がれてゆく。

#### ストレス・リレー

人から人へと感染を繰り返す「ストレス」の連鎖（それぞれの描写が興味深い）。まるで「風が吹けば桶屋が儲かる」という江戸時代から伝わる言い回しのストレス・バージョン。ストレスを与えられた者が、次の者へ悪気はないのにストレスを与えてゆく。著者は、それを連鎖させなかった女性を一人の小さな英雄と讃える。

推理小説を中心に読んでみると、このように人生の一場面を考えさせてくれる小説を読むと新鮮な驚きがある（富士山、伊吹、ストレス・リレーが印象に残った）。